

## 語学教育における異文化理解活動の試み

### —スカイプによる相互交流プログラムの取り組み—

猪口綾奈 (立教大学)

## Building Intercultural Communication in Language Learning Setting: An Exchange Program through Skype

Ayana INOBUCHI (Rikkyo University)

キーワード： 異文化コミュニケーション, 文化的気付き, コミュニケーションスキル, 異文化交流プログラム

Keywords : intercultural communication, cultural awareness, communication skills, cultural exchange programs

### SUMMARY

The purpose of this paper is to build students' cultural awareness in the language classroom for promoting intercultural communication among students. While culture learning in the language class tends to focus on symbolic aspects of culture such as concrete customs or manners, this paper pursues an aspect of cultural perspectives, values and norms. This paper analyzes a language exchange program that encourages students to be aware of their cultural perspectives.

#### 1. はじめに

本実践では、語学教育の場での異文化理解能力の育成を目的とした文化交流活動の報告を目的とする。語学教育の現場では、文化交流活動が頻繁に実施される。言語と文化は密接に関係しているので、目標言語の文化を体験・理解する事は言語習得において非常に効果的である。しかし、それらの活動の多くは伝統行事や食文化、宗教行事などの具体的かつ表面的な文化理解にとどまり、人間の生活行動に影響をもたらさずであろう行動規範の認識や信念、常識観念といった文化への気付きを促す活動は、あまり実施されない傾向があるように思われる。

そこで、人間の行動規範となる文化の「文化的気付き」を促進する交流活動の可能性の探求のために、日本語コース受講中の在米アメリカ人大学生と日本在住の日本人大学生との語学エクステンジプログラムを実施した。そして、アメリカ人大学生には自分の文化を中心に物事を思考し異言語や異文化に対する認知・許容・忍耐力が

という傾向があったので、プログラムを通してそれらにどのような変化が起きるかに注目した。また、学生が、自分がどのような文化の価値基準を用いて他文化（日本文化）を判断・理解していたかを認識できるようになるかにも着目した。

本稿では、エクスチェンジプログラムの目的と概要、プログラム前後のアンケートの詳述、そして学生のコメントから見えてきた学生の意識の変化を報告する。

## 2. プログラム概要

### 2.1 目的

本実践の最終目的は、日本語学習中のアメリカ人学生が、日本人学生とのやり取りを通して互いの相違点を認識することで自己文化の価値基準を理解する事、つまり、自己の行動規範の基礎となる「文化」に対する気付きを促進することである。以下に目的を三点挙げる。

- 1) 他文化を判断・理解する際の自己の価値基準が絶対的ではない事を理解する。
- 2) 他文化のみならず自己文化も他者によって様々に判断・理解される事を理解する。
- 3) 自己文化を客観視するための「文化的気付き」を強化する。

### 2.2 実施形態とスケジュール

本実践は2012年11月2日から12月9日までの5週間連続で、1週間に1回ミーティングを実施した。ミーティング日時は毎週学生同士で事前に決定し、ミーティングで話し合うトピックは教師が1週間前に質問リストなどを記入したタスクシートを配布した。ミーティング後にはウィークリーレポートの提出を課した。会話の媒体はスカイプを使用し、1回のスカイプミーティングは最低でも20分から30分程度を目安としたが、学生には自由に時間配分をしてよいと指示した（ほとんどのペアが毎回30分以上会話をしていた）。また、プログラム実施前と実施後に記述式アンケートを行った。タスクシート、ウィークリーレポート、アンケートは、学生が日本語初級レベルであることを考慮して英語表記にした。以下、表1がスケジュールの全体の流れである。

表1 スケジュール

日程	内容
11月2日—4日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回ミーティングの日時の決定</li> <li>・ プログラム実施前アンケート提出</li> <li>・ タスクシート1の予習</li> </ul>
11月5日—11日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回ミーティング実施 (タスクシート1. Self-introduction: Getting to know each other)</li> <li>・ ウィークリーレポート提出</li> <li>・ タスクシート2の予習</li> </ul>
11月12日—18日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2回ミーティング実施 (タスクシート2. College Life)</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ウィークリーレポート提出</li> <li>・タスクシート3の予習</li> </ul>
11月19日ー25日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3回ミーティング実施 (タスクシート3. Hometown and home country)</li> <li>・ウィークリーレポート提出</li> <li>・タスクシート4の予習</li> </ul>
11月26日ー12月2日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4回ミーティング実施 (タスクシート4. Weekends and holidays)</li> <li>・ウィークリーレポート提出</li> </ul>
12月3日ー9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム実施後アンケート提出</li> </ul>

### 2.3 参加学生

参加した在米学生はアメリカの州立大学で日本語を専攻している1年生7名で、9月から日本語学習を開始した初級学習者である。本実践は正規の日本語クラスには組み込まれていなかったため単位にはならず、興味のある学生がクラス外活動として参加した。また、パートナーの日本人学生もボランティアとして募集し、単位は与えられなかった。

## 3. 教材と課題

### 3.1 タスクシート

タスクシートの狙いは、事前に語彙や文法項目を復習し準備をしておくためのものである。それによって学生は日本語クラスで学んだ学習項目をパートナーとの会話で効率よく運用できる。タスクトピックは全部で4項目で、1. Self-introduction: Getting to know each other、2. College Life、3. Hometown and home country、4. Weekends and holidaysである。それぞれのタスクシートにはトピックについて使用可能なモデル文法項目とモデル質問文が記載されており、学生はそれらを基に独自の質問文や内容展開を事前に準備しておく。

### 3.2 ウィークリーレポート

タスクが1つ終了する毎に、ウィークリーレポートの提出を義務付けた。レポートの目的は、タスクが確実に実行されたかどうかの確認と、使用した文法を復習する機会、そして学生の文化的気付きを促すための振り返り作業である。レポートでは、タスクシートにある質問に対するパートナーの回答と、独自の質問文や会話展開を明記してもらった。また、相互のコミュニケーション方法やミーティング全体の雰囲気などについての感想も書いてもらった。

### 3.3 アンケート

プログラム実施前と実施後にアンケートを実施した。アンケートの目的はプログラ

ム実施の前と後で学生の意識に変化があったかどうかを見るためである。そのため、アンケート質問項目はプログラム実施前と実施後でほぼ同じ内容になっているが（質問1, 2, 3）、実施後アンケートは実施前アンケートに新しい項目を2点追加した（質問4, 5）。実際に学生に配布したアンケートの質問を以下に記載する。

表2 アンケート質問

	実施前アンケート	実施後アンケート
1) 目的・動機	What is your motivation for joining the project? (ex: What do you expect from the project? What makes you decide to be a part of the project?)	[Your goal(s)] 1. Were you satisfied with the project and the communication you had with your partner? Why did you think it was successful or unsuccessful? 2. Did you complete your initial goal(s) during the sessions? What was your goal at the time you started the project, and how did it change over the course of the project?
2) 「日本」についての知識・気付き	What do you currently know about Japan, Japanese people and Japanese culture? (ex: Do you have general ideas about the country, people and culture? What have you heard about them (from internet, books, TV programs, news, your friends etc)? Do you have any first-hand impressions? Which parts do you like/dislike? What is interesting to you? What surprises you?)	[Ideas about Japan] 1. Were your initial ideas about Japan (country, people, culture) correct? If your initial knowledge was incorrect, how was it different? Do those things make sense now that you have communicated with your partner? 2. What did you learn from your partner during the sessions? What do you think was interesting?
3) パートナーとのコミュニケーションの変化・気付き	What do you think will happen when you are communicating with your partner? (ex: Do you think any problem relating to cultural	[Communication] 1. Did any interesting surprise happen? Did you find any difference between you and your partner in terms of gestures, ways of talking, decision-making processes, and methods of describing expressions/feelings? Please explain

	differences will come up? What do you think will go well and not so well?	them in detail if you discovered any. 2. Did you change your communication approach because of the difference with your partner's approach? If so, why did you decide to do so, and what did you change? What effect did the change have on your communication?
4) 自己文化に対する意識の変化		[Your thoughts for the present and the future] 1. Did you find any change in your cultural perspective after the project? (ex: your ideas about your own culture (or "culture" generally) comparing to someone's culture that is different than yours)
5) 異文化接触の際の今後の姿勢		[Your thoughts for the present and the future] 1. Do you think you will change your (cultural) communication approach in the future? If so, how do you want to change?

#### 4. アンケート結果

プログラム前と後のアンケートの質問項目毎に学生のコメントをまとめて考察した。学生のコメントは和訳したものである。

##### 4.1 質問1)目的・動機

プログラム前と後のコメントを以下に表にする。

表3 コメント（目的・動機）

プログラム前	プログラム後
a. 日本語を日本人ともっと話したい。	b. 満足している。
	c. 目的達成できた。
	d. 自分の日本語に自信が持てた。
	e. さらにやる気が出た。

##### 4.1.1 考察

日本語を実践する場を求めて参加した学生がほとんどであった。教師以外に日本語ネイティブ話者と接する機会が非常に少ないというのが最大の理由であるが、自分が勉強した日本語がどの程度日本語ネイティブとの会話で通用するのか知りたいという理由もあったようである。結果は、全員が目的を達成し、かつ今後の学習意欲が高まったという内容であった。

##### 4.2 質問2) 「日本」についての知識・気付き

プログラム前と後のコメントを以下に表にする。

表4 コメント（「日本」についての知識・気付き）

プログラム前	プログラム後
a. 日本人は受身だと思う。	d. 日本人は外国人が嫌いだと聞いたけど、そんな事はなかった。
b. 日本人はアメリカ人よりもシャイで、はっきり物事を言わない。仲良くなるのが難しいかもしれない。	e. 日本人はシャイだと思っていたが、自分の方がシャイだった。
c. 日本人はコンサバティブだと思う（働き者、丁寧、家族中心主義、国に誇りを持っている）。	f. 日本とアメリカはたくさん共通点があるのに、違う文化で面白いと思った。
	g. アメリカで有名な物が日本では無名だったり、逆にアメリカで無名な物が日本では有名だったりして、面白い（例：日本にはKFCがあつて、Netflixがない）。
	h. アメリカで有名な日本の文化を、日本人のパートナーが知らなかった事に驚いた（たくさんアメリカ人がアニメ好きな事を知らなかった）。

#### 4.2.1 考察

この質問の狙いは、日本の印象についてプログラム開始前に質問をしておく事で、プログラム中に生じた意識の変化を学生が認識できるようにする事である。そしてプログラム後に同じ内容のアンケート質問をする事で、意識の差に対する気付きを学生に促す役割がある。

コメントから、学生の日本への見方や考え方がプログラム前と後とで大きく変化したのが分かる。プログラム前では日本と日本人に対する先入観や一般的なイメージが中心であったが、プログラム後は自分の経験に基づいて理解しようとし始めている。

さらに、コメントgとhは、自分が信じていた日本文化と実際の日本文化の間に大きな差があったという気付きを具体的に例を挙げて述べている。この事から、自国文化や他国文化に関わらず、自分が当然と思っていた特定の文化慣習や価値観が実は絶対的ではないという事実を認識し始めたという事が言えるだろう。

また、コメントfからは、漠然とではあるものの、文化についての意識が芽生え始めた様子が見えてくる。学生は、プログラム前は異なる点に焦点を置きがちであったが、プログラム後には共通点に対する意識が拡大し、興味を持ち始めている。

これらのコメントから、異なる文化（日本文化）との接触により、文化に対する理解において先入観や一般化が行われている事実に気が付く事ができ、さらに、自分が

持っている文化へ意識が高まり、気付きが生まれていくプロセスへと移行する可能性が生まれたと考えられる。

4.3 質問3) パートナーとのコミュニケーションの変化・気付き  
プログラム前と後のコメントを以下に表にする。

表5 コメント (パートナーとのコミュニケーションの変化・気付き)

プログラム前	プログラム後
a. 日本語を上手に話せるかどうか不安だ。	b. パートナーと自分のコミュニケーション方法がとても似ていた。
	c. パートナーがたくさん相槌を打つから驚いた。アメリカでは失礼になるほどだった。でも、アメリカでは失礼な事が日本では礼儀だと知って興味深かった。
	d. 日本とアメリカは全く違う言語と文化を持っているのに、時々同じ言語規則を持っていて面白かった(「長い」が物の長さだけでなく時間の長さも表現する事)。

#### 4.3.1 考察

この質問の狙いは、プログラム前後の意識の変化の気付きを学生に促す点では質問2と同じである。しかし、質問3は、知識や事実についての気付きに加えて、言語表現やコミュニケーション方法についての気付きにも焦点を置いている。

プログラム前のコメントでは、学生の漠然とした不安感が中心であった(コメントa)。日本語学習期間が短いために、パートナーの日本語が理解できなかつたり、または自分の日本語を理解してもらえなかつたりというように、会話が続かないことをとても心配していたようである。

プログラム後には、学生の不安感は一掃され、パートナーとのコミュニケーション方法の違いに高い興味を示しているコメントが多かった。特に、コメントcは、礼儀正しさの表現方法が日本とアメリカで正反対である事について言及している。このような実体験によって、質問2で意識する事ができた「自分が当然と思っていた特定の文化慣習や価値観が実は絶対的ではない」という認識をより意識化できたのではないだろうか。

4.4 質問4) 自己文化に対する意識の変化  
プログラム後のコメントを以下に表にする。

表6 コメント（自己文化に対する意識の変化）

プログラム後
a. 特に変化なし。
b. 文化は、国内と国外で見方が違うのかもしれないと思った。例えば、僕は日本人は暴力的な映画に慣れていると思っていたが（今まで観た映画はとても暴力的だった）、パートナーが「バトルロワイヤル」を「グロテスクだ」と言った時、とても驚いた。日本人ではない僕が日本のメインストリームだと思っていた物（暴力的な映画）は、本当は日本のメインストリームじゃないのかもしれないと思った。そして、アメリカ文化はアメリカ国外の人にどのように思われているのか、考え始めた。反アメリカ主義の現在、くだらないハリウッド映画の影響でアメリカが誤解されているかもしれない。アメリカ人がどのような人間であるかを映画で判断されてしまうかもしれない。つまり、映画がアメリカ人とアメリカ文化を反映していると他の人が信じてしまうからだ。

#### 4.4.1 考察

質問4はプログラム前のアンケートにはない項目である。プログラム終了後に学生が持っている文化、つまり価値観や常識観念について、変化や気づきがあったか、そしてそれらを認識できたかを確認する質問である。

結果は、ほとんどの学生は変化を認識していなかったが、1名の学生には意識の変化が見られた（コメントb）。いくつかの日本映画を観た事があるこの学生は、日本では暴力的な映画が一般的なのだと思っていたようである。しかし、パートナーの日本人学生の反応から自分の認識が偏っていたと気づき、そこから、自己文化（アメリカ文化）に対する他者の視線を意識し始めている。

現段階では、はっきりとした「自己文化に対する意識の変化」は起きていないが、「文化」が一般論的に定義できない存在である事に気づき、自分が信じている自己文化もまた「他者」によって様々に定義され得る存在だと気付いたのは、大きな変化であると思われる。

#### 4.5 質問5) 異文化接触の際の今後の姿勢

プログラム後のコメントを以下に表にする。

表7 コメント（異文化接触の際の今後の姿勢）

プログラム後
a. もっと分かりやすく話すようにしたい。
b. 言語のバリアがある時は、自分にも相手にも忍耐強くなろうと思った。一番の学びは、間違ってもいいという事だ。
c. 言語のバリアにこれからはもっと注意したい。このプログラムのおかげで、これからはバリアを越えて自信を持ってコミュニケーションできると思う。

d. 異文化の人と話す時は、自分の文化を間違った認識で表現しないように気を付けた。そして、僕が理解していると思っている異国の文化は、もしかしたら自分の思い込みで、その文化の本当の姿ではないかもしれない。つまり、日本で暴力的な映画が多いからといって、その映画が日本文化を反映していると思うのはフェアじゃない。それは、レディーガガがアメリカ文化の反映だと思われたくない気持ちと同じだと思う。

#### 4.5.1 考察

質問5も質問4と同様にプログラム前のアンケートにはない項目である。この項目の狙いは、プログラム終了後に学生の今後の異文化に対する姿勢に変化があれば、学生が認識していない彼らの自己文化への気付きをコメントから発見できる点である。

結果として、ほとんどの学生のコメントは、自己文化への気付きではなく具体的なコミュニケーション方法について言及していた。聞き手が理解しやすいように配慮する、言語のバリアに忍耐強くなるなど、ほぼ全てがプログラムの効果を高く評価していた一方で、自己文化への気付きについては1名のみ言及にとどまった(コメントd)。この学生は、質問4で文化への気付きがあった学生である。彼は、自己文化も含めて特定の文化に対する自分の理解が常に正しいというわけではないという事実が気が付いた。そして、異文化理解に対して注意を払うのと同様に、自己文化を表現する際にも気を付けたいとまとめている。

これらのコメントから、学生の今後のコミュニケーション方法については改善が見込まれるが、本実践の目的である「文化的気付き」への到達は非常に難しい事が分かった。

#### 5. アンケート結果まとめ

全てのコメントを考察すると、本実践の最終目的3<自己文化を客観視するための「文化的気付き」を強化する>の学生の「文化的気付き」には到達しなかった事が分かる。質問2「日本についての知識・気付き」と質問3「パートナーとのコミュニケーションの変化・気付き」のコメントを見ると、学生は自分が当然と思っていた特定の文化慣習や価値観が実は絶対的ではないという事実を意識化し始めたものの、質問4「自己文化に対する意識の変化」ではほとんどの学生が変化を感じていなかった。そして、質問5「異文化接触の際の今後の姿勢」においては、自己文化の気付きではなくコミュニケーション方法についての言及がほとんどであった。

つまり、本実践は、最終目的1<他文化を判断・理解する際の自己の価値基準が絶対的ではない事を理解>と目的2<他文化のみならず自己文化も他者によって様々な判断・理解される事を理解する>については成果があったが、「文化的気付き」の領域までは到達できなかったという結果になった。

一方で、1名の学生には大きな認識の変化があった。この学生は、パートナーとのやり取りから自己文化と他者文化に対する自分の理解が絶対的ではないという事実が気付き、さらに、「文化」に対して今までよりも注意を払おうとする姿勢を持ち始めた

のは、大きな変化だと思われる。

#### 6. プログラムの今後とその課題

本実践で自己文化への「文化的気付き」に到達できなかった理由として、3点が考えられる。まず、プログラム実施期間が短かったために、意識変化を学生が認識できるようになる前にプログラムが終了したという点である。2点目は、文化理解学習についての事前インプットがほとんどなかった事である。最後の点は、学生の意識変化の気付きを手助けする教師からのファシリテーションがプログラム実施中になかった事、などが考えられる。

上記の改善点を踏まえ、次回のプログラム実施の際には1ヶ月以上の長期プロジェクトの可能性を探る必要がある。さらに、学生が自分に起きた変化を自分で効果的に認識できるようなアンケート質問項目の見直しも必要だろう。加えて、プログラム前のオリエンテーションやプログラム中の面談なども有効であると考えられる。

#### 参考文献

- Cronk, Lee. (1999). *That Complex Whole: Culture and the Evolution of Human Behavior*. Boulder, CO: Westview Press.
- Lustig, Myron W, and Jolene Koester. (1993). *Intercultural Competence: Interpersonal Communication Across Cultures (4<sup>th</sup> ed.)*. Boston; MA: Allyn and Bacon.
- Moran, Patrick R. (2001). *Teaching Culture: Perspectives in Practice*. Australia; Boston; MA: Heinle & Heinle/Thomson Learning, c2001.
- O'Dowd, Robert. (2007). Evaluating the outcomes of online intercultural exchange. *English Language Teachers Journal* 6 1/2, 144-152.
- Schueller, Jeanne. (2007). One Good Turn Deserves Another: Sustaining an Intercultural E-Mail Exchange. *Teaching German* 40.2, 183-196
- Shih, Yu-Chih Doris, and Cifuentes, Lauren. (2003). Taiwanese Intercultural Phenomena and Issues in a United States-Taiwan Telecommunications Partnership. *Educational Technology Research and Development* 51.3, 82-90.
- Storti, Craig. (1994). *Cross-Cultural Dialogues: 74 Brief Encounters with Culture Difference*. Yarmouth, ME. Intercultural Press.
- Walker, Richard, and Jeurissen, Ronald. (2003). E-Based Solutions to Support Intercultural Business Ethics Instruction: An Exploratory Approach in Course Design and Delivery. *Journal of Business Ethics* 48.1, 113-126.
- Ware, Paige D, and Kramsch, Claire. (2005). Toward an Intercultural Stance: Teaching German and English through Telecollaboration. *The Modern Language Journal* 89.2, 190-205.
- Zhu, Yunxia. (2005). A collaborative online project between New Zealand and New York. *Business Communication Quarterly*, 68.1, 81-96.